

ればなり、王の御歌に、月立にけりとおるはたゞ天に月の見ゆる意のみなるを、此歌にては、其れを月次の歌かはりて初て月の見えそめたるに取なしたるにて、朔てふ名の意なり、さて此歌に依て思へば、此月經は初めて見えたる遍にやありけむ、されば初事にて習ざる故に、心せずて意須比にも著て、人の御目にもかゝりけるにやあらむ、されどかくまで推度らむがにも、やあらむ、

〔輟畊録 十四〕上頭入月

今世女子之笄曰上頭、而倡家處女初得薦寢於人亦曰上頭、花蓋夫人宮詞年初十五最風流新賜雲鬢使上頭、又天癸曰月事、黃帝內經、女子二七而天癸至、月事以時下、又曰、女子不月、史記濟北王侍者韓女病、月事不下、診其腎脈、奮而不屬、故曰月不下、又程姬有所避、不願進、注天子諸侯群妾以次進御、有月事者止不御、更不口說、故以丹注面目、的々爲識、令女史見之、王察神女賦、施玄的々、即上所云也、然入月二字尤新、王建宮詞、密奏君王知入月、喚人相伴洗裙裾、

〔台記〕久安三年八月十七日戊申、今日有月事之女在局、又不犯女、自余同昨日、

〔永正記 上〕一婦人月水七個日

但血氣未止者不限七日、血氣止經二個日之後、三个日之精進終、而免參宮也、血氣之落付物等掃除、爰同火日限、燧火等事、左載之、

月水精進事、譬者一日成月水女姓、迄五日有血氣、六日血氣止之間、八日過之後、十一日免參宮也、但十日迄宿館參、無苦見歎、宮中維南維北、可有思慮也、

浴鹽之條無定法、宜任子意哉、洗髮事者勿論也、相構過時、每日可替火也、齋內親王御月水事、見本文矣、

次成月水女姓、經一兩日之後、雖血氣止、於七個日者忌之也、

次七個日以後過明、又七個日之内、只一度有血氣號、又出、是者經中二個日過明也、是雖無指所見、近